

3 目標達成に向けた課題

第6期計画で抽出した、基本目標の達成に向けた課題について、継続して取り組む必要があるため再掲として記載します。

（１）家庭・社会での役割や生活の充実感を持ち続ける環境が十分に整備されていない

高齢になっても、住み慣れた地域でいきいきと暮らせるようにするには、家庭・社会での役割や生活の充実感を持ち続けることが必要です。しかし、家族のあり方が多様になり、高齢になると地域活動への参加や活動の継続が難しくなる中、家庭や社会の中での居場所や役割を持ち続ける環境の整備をさらに推進していくことが必要です。

（２）高齢者の多様な生活支援ニーズに対応できる支援・サービスが不足している

生活する上での不安感や困りごとがあっても在宅で暮らせるようにするには、そういった生活支援ニーズへの支援・サービスが必要です。しかし、多様な生活支援ニーズにきめ細かに対応できる支援・サービスが不足していることが課題です。

（３）高齢者自身の介護予防への意識向上と主体的な取り組みが進んでいない

自分の能力に応じて、できる限り自立して暮らせるようにするには、高齢者が要介護状態や病気等になることを予防したり、状態の悪化を防いだりする取り組みが必要です。また、（１）（２）とも関わりますが、取り組みを継続するためには、地域における居場所や活動の場が必要です。しかし、地域の中で居場所や役割を感じられる場の確保が不十分であり、高齢者自身ができるだけ介護を必要とする状態にならないように意識したり、主体的に取り組んだりすることが十分にできていないことが課題です。

（４）高齢者の尊厳や財産を守る取り組みが、高齢者や地域の変化に対応しきれていない

重度の要介護状態や認知症になっても、あるいは経済的な不安があっても、住み慣れた地域で、個人の尊厳が守られた環境で暮らせるようにするには、生活に合った住まいや、自己決定できる支援体制の整備が必要です。しかし、高齢者の抱える課題が多様になる中、身寄りのない独居高齢者の地域でのサポート体制等、課題に応じた取り組みを検討し、推進していくことが必要です。

また、本市では持家率が高く、一定程度住まいは確保されているものの、重度の要介護状態や認知症になっても、自らの希望と経済力に基づき、状態に応じて自立した生活を営める住まいが十分に整備されていないことも課題です。

（５）認知症の人への支援が統合的に提供されていない

認知症になっても、住み慣れた地域で暮らせるようにするには、早期発見・対応、介護・医療をはじめとした支援の充実やスキルの向上、地域ぐるみの理解・支援など、多様な支援が必要です。また、今後の認知症高齢者の増加を踏まえて取り組みの強化が求められています。しかし、早期発見・対応が実施できていないケースもあり、医療・介護の専門職による対応や地域による見守りなどそれぞれの連携が十分とはいえない現状もあり、必要な支援が統合的に提供されていないことが課題です。

（６）高齢者に対する支援・サービスが十分に周知できていない

さまざまな環境変化の中、高齢者が住み慣れた地域で暮らし続けるためには、何らかの課題を抱えた場合に、すみやかに支援・サービスを受けられる環境づくりが必要です。しかし、高齢者自身や家族・地域住民等に対して、支援・サービスについての周知が十分にできておらず、支援が必要になった場合に早期に支援につなげるしくみが十分に整っていないことが課題です。

（７）在宅生活を送る高齢者の医療ニーズに対応する体制が不十分である

医療や看護が必要になっても在宅で暮らせるようにするには、状態に応じた医療的処置や、介護と連携して療養を支援する在宅医療・介護サービスが必要です。医療と介護の顔の見える関係性は構築されつつありますが、本人の望む暮らしを実現するためには、さらに連携を強化し、在宅生活を送る高齢者の医療ニーズに対応していく必要があります。

（８）重度の認定者や認知症の高齢者の在宅生活を支える居宅サービスの整備が不十分である

重度の要介護状態や認知症になっても在宅で暮らせるようにするには、状態の悪化を防ぎながら、生活する上で必要なケアを行う介護サービスが必要です。要介護度が重度の高齢者や認知症高齢者の増加が見込まれる中、圏域における施設サービスとのバランスを勘案した居宅サービスの提供体制の整備が課題です。